

文法指導の書き換えについての考察

—〈too ... to do〉と〈so ... that S cannot do〉の書き換えにおける、
より正確な説明を求めて—

伊計 拓郎

1. 序

英語を学習する際には、「総合英語」という名がついた参考書(以下、「総合英語」)を活用する機会がよくあるだろう。主な対象者は英文法を学習する中高生かもしれないが、中には社会人が手に取ることもあり、また英語教員も文法指導の参考によく活用しているのではないだろうか。そうした「総合英語」の中には、文法の理解を深めるために、「書き換え」を用いた説明が含まれていることが多い。

しかし、従来の説明で用いられてきた「書き換え」が、実際には成立しないような事例が見つかることがある。ここでは〈too ... to do〉と〈so ... that S cannot do〉との書き換えに焦点を当てて、その書き換えの公式が妥当なものかを検討していきたい。

2. 書き換えの妥当性

まず、〈too ... to do〉の意味と特徴を、以下のようまとめる。

【意味】

- ・「…すぎて～できない」(結果)
- ・「～するにはあまりに…すぎる」(程度)

【特徴】

- ・ too の後ろに形容詞・副詞が来る
- ・ not を使用しないが、「否定」の意味が含まれる

そして、この〈too ... to do〉は〈so ... that S cannot do〉で書き換えが可能(ほぼ同じ意味)と説明をする「総合英語」は少なくない。いくつか書籍を開いてみると、that のあとに cannot が置かれることを示唆する内容が散見された。

確かに、〈too ... to do〉≒〈so ... that S cannot do〉のように1対1の公式として覚えるのは学習者にとっては負担が少なく、学習段階によっては効果的であるといえる。

しかし、いくつかの英文を観察する中で、この cannot を用いた書き換えが成立しないように思える事例が複数見つかった。

初めは、『ジーニアス英和辞典』(第6版)の用例プラスからの引用である。

(3) She is too decent to blame you.

「彼女は思いやりのある人だから君を責めたりしない。」

(3)の文では「君を責めたりしない」と伝えることで相手を安心させる意図があると考えてよいだろう。この英文を以下の(4)のように〈so ... that S cannot do〉で書き換えてしまうと「思いやりがあるので(本当は責めたいが)責めることができない」のように「人がよすぎることがあだになっている」という意味にも受け取れ、(3)が含意する内容を正しく表せていない。ここでは、(5)のように、cannot ではなく won't を用いると、もとの文の内容を正しく表わしているといえるだろう。

(4) She is so decent that she *can't* blame you.

「彼女は思いやりがあるので、君を責めることができない。」

(5) She is so decent that she *won't* blame you.

「彼女は思いやりがあるので、君を責めることはしないだろう。」

次に、中原(2008)には以下の書き換えがある。

(6) She is so proud that she does not ask for my help.

(7) She is too proud to ask for my help.

「彼女は気位が高いので私の助けを求めたりしない」

(6)では that 節中で does not が使用され、「彼女はだれかに依存することのない自立した人物である」という意味だと考えられる。仮に that 節中で does not ではなく cannot を使用した場合は「助けを求

めることができないくらいプライドの高い人物」という意味になり、場合によってはネガティブな印象にも捉えられるだろう。そうした *cannot* では言い換えがきかない文が、(7)のように *<too ... to do>* で書き換えられている。

江川(1991)でも類例が見られる。(ここでは、*too* のあとに名詞句が続くので、*such ... that* で書き換えられている。)

(8) He is *too good* an interpreter *to make* that kind of mistake.

(9) He is *such* a good interpreter *that* he won't make that kind of mistake.

「彼ほどの通訳がそんな間違いをすることはあるまい」

(9)は *that* he のあとに *won't* が使用されているので「うっかりとミスを犯すような人ではない」という発話者の予測・推量を表しており、それを(8)のように書き換えている。また、解説のなかでは *cannot* という言葉を用いず、「*so ... that* で言い換えると否定が表れる」という表現にとどめている。

Quirk et al. (1985)でも(10)~(13)のような例を挙げている。

(10) It is *so* good a movie *that* we mustn't miss it.

(11) It's *too* good a movie *to* miss.

(10)では *that* 節中で *mustn't* が使用されている。ここでは *cannot* でも間違いではないが、その場合は「可能」ではなく「許可」の否定となり「できない」ではなく「してはいけない」という意味と考えるほうが妥当だろう。「not miss it(見逃さないこと)を義務とする=見逃してはいけない(禁止)」, つまり「ぜひ見てほしい」という発話者の思いの強さが伝わる表現となっており、それを(11)のように書き換えている。

(12) It was *such* a pleasant day *that* I didn't want to go to school.

(13) It was *too* pleasant a day *to* go to school.

(12)でも、*cannot* を使用せずに *didn't want* としており、「できない」ではなく「する気持ちにならない」といった意味を表し、(13)のように言い換えている。Quirk et al. (1985)では、以下のように述べている。

There is a close correspondence between *so ... that* and *such ... that* constructions, when the

that-clause is negative, and constructions with *too* and an infinitive clause:

つまり、*<so ... that ~>* の *that* 節内が否定文の場合は、*<too ... to do>* と同じような意味になると説明されており、*that* 節内が *cannot* に限られているわけではないことがわかる。

興味深いことに、「総合英語」の中でも『アースライズ総合英語』(数研出版)のような近年発刊された参考書では、「(so ... that S'+V' ~)の形を使って、同じような意味で表すことができる。that(接続詞)のあとが、否定文になることに注意。」のように、*cannot* を使った書き換えに限らない説明をしているものも見つかる。推測の域ではあるが、インターネットをはじめとした技術が発達したことで、英語に触れる機会が増え、よりいっそう英語が身近な時代になった。膨大な量の言語事実を反映するために、文法説明もより多様な例に対応できるものへと姿を変えつつあるのではないだろうか。

3. 結

以上、従来の説明で使われてきた *<too ... to do>* ≡ *<so ... that S cannot do>* という書き換えが成り立たない事例を確認してきた。これらの事例も網羅するためには *<too ... to do>* の書き換えは *<so ... that S not>* のように、*that* 節以下は「否定文」とするのがより正確な説明といえるだろう。形式だけに注目した書き換えは、原義を歪めることにもつながりかねない。教員の立場として、書き換えを用いて指導をする際には、適切な英語表現になるように英文全体の意味を考えることを心がけていきたい。

参考文献

Quirk et al. (1985). *A Comprehensive grammar of the English language*, Longman

江川泰一郎(1991).『改訂三版 英文法解説』金子書房

中原道喜(2008).『新マスター英文法 全面改訂版』聖文新社

三村浩一監修(2021).『チャート式シリーズ アースライズ総合英語』数研出版

(帝塚山学院大学 専任講師)